高野山における二つの藤堂家墓地

― 高室院文書と石造物の調査から ―

熊﨑　司

１．はじめに

外様大名でありながら、徳川家康の信任が厚かったことで知られる藤堂高虎（1556-1630）は、慶長 13 年（1608）に伊勢国津藩に藩主として入府した。以後、明治維新を迎えるまで津藩は藤堂家が代々藩主となっている。その津藩の初期史料である『公室年譜略』(1) には、藩主の遺骨をめぐって、高野山の子院との間で対応に苦慮する藤堂家の姿が記されている。本稿では、『公室年譜略』の記事について、高野山で確認した藤堂家の墓地と、関連する古文書について検討し、近世大名と高野山の関係の一例として紹介したい。

２．高野山と藤堂家

『公室年譜略』巻 31（高次公巻之 13）の延宝 4 年（1676）11 月 23 日条に、次のような記事がみられる。

> 高次公ノ遺骨ヲ高野山ニ納メント有テ石川権之丞ヲ高野山へ遣シ高室院ニ於テ法事ヲ始ルノ処同寺中釈迦院ヨリ是ヲ障ヘタリ因テ遺骨ヲ高室院ニ預ケテ石川ハ東武ニ帰リテ此事ヲ老臣迄報ス其年ハ其分也翌年高室院ヨリ大切ノ遺骨ヲ久ク預リ奉ル事迷惑スル趣ヲ歎訴スルニ依テ又石川ヲ使トシテ　高虎公ノ石塔ノ如クスヘシト命セラルトイヘトモ　高虎公ノ石碑ナキ故ニ　松寿院殿ノ碑ノ如クニシテ　松林院殿ノ逆主ニ拵ヘ此内ニ納メ奉ルト也又釈迦院ハ当家ニ由緒アリト云々
>
> 累世紀事ニ曰高野山ニ　藤堂家ト細川家ハ宿坊ナシ　当家ハ元来五ノ谷西明院ト云寺宿坊ナリシヲ高室院役者ニテ久ク東武ニ在府ス故ニ　当家通好有テ宿坊ノ如ク成シ也然トモ西明院承引セス又西明院宿坊也ト云ヘハ高室院承引セス因テ宿坊トハ両院共ニ云難シ高室院ハ　高山公登山ノ時ノ住院也依テ尊牌有リ西明院ニハ　高山公ノ佩劔納マリ在ルト也

上記の記事は、津藩２代藩主藤堂高次（1676 年没）の遺骨を高野山に納骨しようとした際に、高野山の子院である「高室院」と「釈迦院」の間で板挟みとなった藤堂家の姿がうかがわれる。また、藤堂家はもともとは「西明院」とつながりがあったものの、「高室院」とも関係を深め、その両者の間でも対立があった経緯が記されている (2)。

３．高野山の藤堂家墓地

和歌山県伊都郡高野町に位置する真言宗の聖地・高野山のうち、奥之院は空海の御廟のある霊域

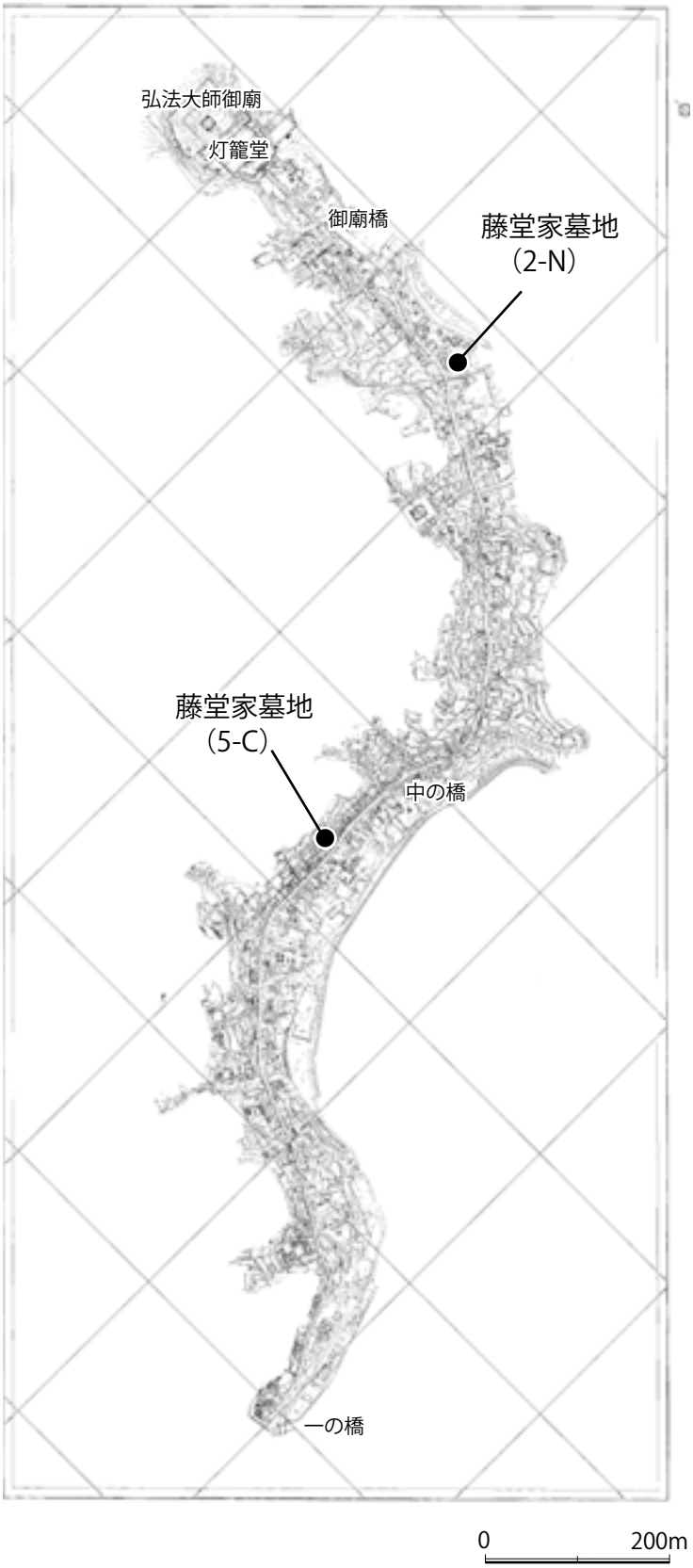

図１　高野山奥之院と藤堂家墓地（高野町 2019 に加筆）

で、一の橋から奥之院灯籠堂まで約 2km の参道には鎌倉時代から現代に至るまでの墓石が並んでおり、その数は 20 万基とも 30 万基ともいわれている。この奥之院については、高野町教育委員会により悉皆的な調査報告書（高野町教育委員会 2019）が刊行されており、各大名家の墓地の位置を知ることができる。

その成果によると、津藩藤堂家については「藩主以外の墓所一覧」に一族の墓地が２箇所あることが記されている。ひとつは奥之院の中でも御廟に近い 2-N 地点で、法然上人墓所に近く、浅野家墓所の南側にあたる。もうひとつの場所は、そこから一の橋側に約 500 mほど離れた 5-C 地点で、参道沿いの松平家や内藤家の墓所から一段高い場所にある（図 1 参照）。

この２つの墓所の内容を把握するため、2023 年２月と同年５月に、現地にて石造物の銘文を確認した。その成果が図２と表１・２である。そこから推測される事実は、同じ津藩藤堂家のうち、2-N 地点の墓所は西明院、5-C 地点の墓所は高室院に関係するものと考えられる。

４．高室院文書に描かれた石塔

高野山には、現在 117 の子院が存在するが [3]、「公室年譜略」の記事に登場する子院で現存するものは

表１　高野山奥之院　藤堂家墓地石造物（2-N）

区画	番号	種別	全高	材質	年代(銘文)	銘文	備考(供養の対象)
2-N	1	五輪塔	126	砂岩	寛永15年 (1638)	【地輪正面】 寛永十五年／生國但劦今者勢州姉津 (ア)爲　紅照院休誉妙桂大姉 藤堂四良右衛門尉爲□[　　]／六月廿九日 ※地輪右側は見えないため、未確認。	不明(藤堂四郎右衛門宗綱の縁者か)。四郎右衛門家は原姓橋本氏。初代弥助則綱は、一時長連久(松寿院父)の養子。
2-N	2	五輪塔	145	砂岩	寛永7年 (1630)	【地輪左側】 宿坊／西明院／五□□ 【地輪裏側】 寛永七年／[　　]但州[　　]□□今□州□ (ア)爲寶□□□禅定門　菩提 [　　]院殿[　　]衛門 二月廿九日	藤堂弥助則綱か(四郎右衛門家、微妙院実山用真居士、死去年月日一致)。則綱は、一時長連久(松寿院父)の養子。
2-N	3	五輪塔	187	砂岩	寛永10年 (1633)	【地輪正面】 寛永十年／生國但州今者勢劦姉津 (ア)爲信敬院妙法大姉　菩提 長監物丞爲内儀也／八月廿七日 【地輪左側】 ※銘あり、判読不可。	藤堂監物信直室阿桃(院号は林泉『藤堂姓諸家等家譜集』では信秋院とあり。死去年月日一致)。信直は松寿院の甥。
2-N	4	五輪塔	189	砂岩	寛永11年 (1634)	【地輪正面】 勢州姉津西川又兵衛立之 (ア)爲月桂妙雲禅定尼菩提 寛永十一年十二月廿五日	不明。西川又兵衛は寛永十五年以前に登用の藤堂家臣。
2-N	5	五輪塔	210	砂岩	正保4年 (1647)	【地輪正面】 生国但劦美含郡□□谷□□ □村□□□助殿御内□ (ア)爲　□□妙泉禅定尼 正保四年六月十五日	不明(藤堂弥助則綱室と戒名の「妙泉」のみ一致、死去年月日は異なる)。
2-N	6	五輪塔	210	砂岩	寛永8年 (1631)	【地輪正面】 生国但州美含郡今江戸／長織部百箇日也 (ア)無□宗哲居士 長監物造立／寛永八辛未年五月八日命日 【地輪右側】 五□西明院	長連房(藤堂監物家初代、松寿院兄)
2-N	7	五輪塔	261	砂岩	寛永8年 (1631)	【地輪正面】 爲藤堂佐兵衛尉高重追善也 寶樹院殿淨岸 (ア)爲 仙峯居士菩提 寛永八辛未年卯月十日御命日 【地輪裏側】 御宿坊西之□谷／今ハ／光輪院 西明院住持宥須	高虎子高重(高次弟)
2-N	8	五輪塔	286	砂岩	寛永13年 (1636)	【地輪正面】 生國江劦今者伊勢姉津城主藤堂／大学助立之 (ア)爲了玄院殿智性菩提 寛永十三年六月十三日 【地輪左側】 宿坊五□室西明院／今者光輪院	高次子市右衛門(高久兄)。早世。
2-N	9	五輪塔	184	花崗岩	天和3年 (1683)	【地輪正面】 勢劦姉津／盛運院達叟常廓居士 (ア)清照院一程壽輪大姉 壽光院瑞岩永祥大姉 藤堂内蔵允信乾建立之 【地輪右側】 宿坊／西明院 天和三年亥九月廿八日	不明。藤堂監物家の一族に内蔵允を名乗る人物はいるが、信乾は不明。
2-N	10	五輪塔	264	花崗岩	寛永16年 (1639)	【地輪正面】 寛永十六年／御施主勢州津城主也 (ア)爲真善院妙宗禅定尼菩提也 藤堂大学殿御□／五月三日 【地輪右側】 宿坊　今ハ　光輪院 (アク)西明院／五室	不明。寛永十六年時点の大学は高次。
2-N	11	五輪塔	230	花崗岩	寛永14年 (1637)	【地輪正面】 寛永十四年 生国但州美含郡長織部殿子息 (ア)爲喜屋宗歓居士 今者勢州姉津藤堂監物丞逆修也 八月十五日	藤堂監物信直(松寿院の甥)

高室院のみである。西明院とみられる墓地区画の石造物には、「今ハ光輪院」の文字があるが、その光輪院も現存しない。この高室院には、多数の古文書が残されており、神奈川県の寒川町史の編纂事業により、マイクロフィルムでの撮影や目録が作成されていることが判明した。この目録（寒川町企画部企画課町史編さん担当 2006）には、高室院に関係する大名家ごとに整理されており、主に北条家、

表２　高野山奥之院　藤堂家墓地石造物（5-C）

区画	番号	種別	全高	材質	年代(銘文)	銘文	備考(供養の対象)
5-C	1	五輪塔	158	砂岩	-	(銘文なし)	不明
5-C	2	宝篋印塔	194	砂岩	文禄2年 (1593)	【基礎正面】 文禄二年□巳 為明□□仙大禅定門　□□ 十二月[　　] 【基礎右側】 右近大夫□□ 【基礎左側】 土劔[　　]	不明
5-C	3	五輪塔	211	花崗岩	宝永4年 (1707)	【地輪正面】 宝永四丁亥年 松林院殿 (ア)　大姉爲自身 智月妙光 正月廿七日 【地輪右側】 御宿坊／髙室院 (アク) 御使者　幾田三右衛門／廣山甚右衛門	高次室平井佐久
5-C	4	五輪塔	225	花崗岩	天和2年 (1682)	【地輪正面】 長生院殿 (ア)爲　逆修善根 仙嶽栄壽大姉 【地輪右側】 御使者／石河権之丞 (アク) 御宿坊／髙室院 【地輪左側】 天和二年 (アー) 十月五日	高次室多羅尾振。長生院、後に浄明院。
5-C	5	宝篋印塔	186	砂岩	慶長20年 (1615)	【基礎裏側】 慶長廿年 [　　] 霊陽院殿[　　] 石河内記[　　] 五月七日	不明
5-C	6	五輪塔	141	花崗岩	慶長16年 (1611) 寛永3年 (1626)	【地輪正面】 江州佐和山三浦五郎右衛門為父母 慶長十六天七月廿九日 安祥院殿蓋覚 (ア)　浄蓮居士 寛永三天五月廿八日 清正院殿花覚 妙蓮居士	不明

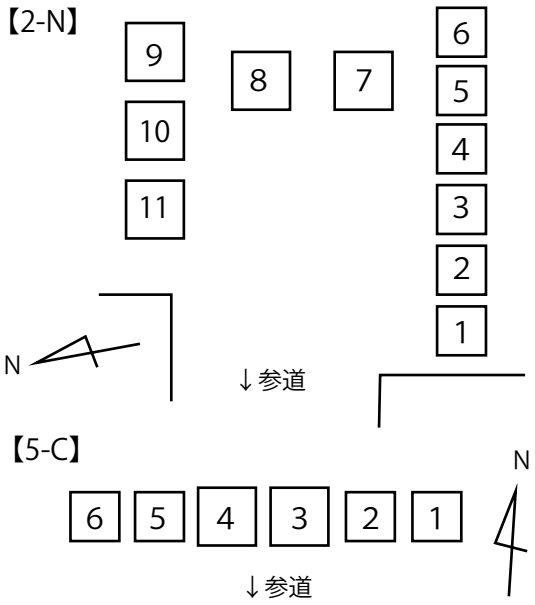

図２　高野山奥之院　藤堂家関係墓所配置図
（番号は一覧表と対応）

写真１　高野山奥之院　藤堂家墓地（2-N）

写真２　高野山奥之院　藤堂家墓地（5-C）

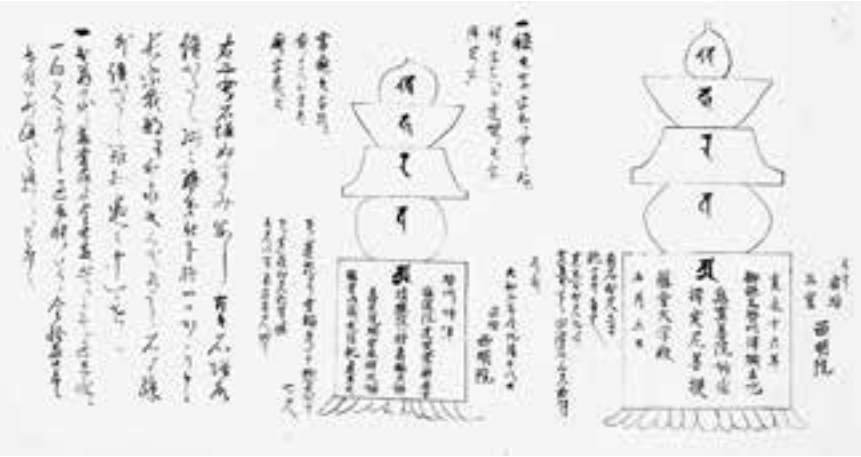

写真 3　高室院文書「藤堂家石塔銘文文字控」
（寒川文書館所蔵写真帳「高室院文書」245-12959 ～ 12960）

山内家、尾張徳川家、本多家、大久保家、藤懸家とともに藤堂家が挙げられている。藤堂家に関係する文書は 78 点にのぼり、時期も 1630 年代から 1830 年代までと、江戸時代を通じての記録が残されている。

今回、マイクロフィルムに撮影されている文書を確認する中で、1 点のみであるが、五輪塔の図が描かれている文書が確認できた。目録では整理上、「藤堂家石塔銘文文字控」と史料名が付けられている。この文書は一紙で、西明院の区画にある五輪塔（2-N No.10・No.9）の形態と銘文、各部の寸法が記されており、今回、現地で確認したそれぞれの五輪塔の銘文ともよく一致する。文書の後半には、「右二本ノ石塔ぬすみ写し古キ石塔故読かたく難儀仕□□一日かかり申候」、「長宗我部并和泉殿はかニ有是之石も殊の外読みかたし」の記載がある。「和泉殿」は藤堂和泉守のことであろう。No.9 の五輪塔が天和 3 年（1683）、No.10 の五輪塔には寛永 16 年（1639）の銘があり、これについて「古キ石塔故読みかたく」とすることから、文書が書かれたのは天和 3 年からある程度の時間が経った時期となる。この文書からは、この二基の五輪塔について図を作成し、銘文を判読することになった理由は不明であるが、西明院ゆかりの墓所にある五輪塔の記録が、もう一方の高室院に残されていることは興味深い[(4)]。

5．おわりに

高野山奥之院での藤堂家墓地のあり方を確認した結果、「公室年譜略」にみられるように 32 万石の大名である藤堂家といえども、高野山の子院の意向に配慮しながら関係を保っている様子がうかがわれた。当初は、高野山奥之院に藤堂家関係の 2 箇所の墓域があることは、津藩とその支藩である久居藩のそれぞれの墓域が設けられた結果ではないかと考えたが、現地での石造物の確認の結果は、西明院ゆかりの墓所と、高室院ゆかりの墓所が設けられた結果と考えられる。現在、高野山奥之院で確認できた石造物は、西明院ゆかりの墓所はほぼ寛永年間に集中しており、その他のものも 17 世紀代のものである。一方、高室院ゆかりの墓所は、文禄年間から宝永年間までの幅があるが、確実に藤

堂家と関係する銘文を持つ石造物は天和・宝永年間の２基のみであり、西明院ゆかりの墓所より遅れる可能性もある。高室院文書には、今回紹介した文書のほかにも多数の石塔建立に関係する文書や、津藩主の逝去に関するやり取りなどが残されている。これらの内容の分析は今後の課題であり、その分析の結果により、藤堂家と高野山の関係をより深く理解できるものと考えられる。引き続き石造物と古文書の両面から調査を続け、他藩の状況とも比較しながら検討したい。

謝辞

筆者は京都府立大学在学中、本来の研究対象としていた古墳時代の土器類とは別に、研究室の事業として滋賀県などの石造物調査に参加する機会を得た。菱田哲郎先生からは調査を通じて、常夜燈の実測作業など、石造物の調査方法について多くの御指導をいただいた。本稿はその成果としてはあまりに拙い内容であるが、現在の研究課題をまとめることで、先生が退官を迎えられる慶賀への献呈をお許しいただきたい。

また、本稿の作成にあたり、高野山の現地確認と供養者の検討では竹田憲治・山路裕樹・齋藤隼人の各氏のご協力とご教示をいただいた。また、高室院文書の調査及び掲載にあたっては、寒川町文書館と高室院のご協力とご理解をいただいた。末筆ながら記して御礼申し上げます。

註

（１）「公室年譜略」は、津藩伊賀付の中級武士である喜田村矩常が編纂した記録である。藤堂家に伝来した藤堂高潔本が関東大震災で灰燼に帰したため、原本は残されていないが、東京大学史料編纂所が作成した影印本が残されており、それを翻刻したものが上野市古文書刊行会から刊行されている（上野市古文書刊行会 2002）。

（２）金剛峯寺に伝わる「高野山絵図」（1706 年）には、「高室院」と「西明院」が描かれている。「釈迦院」については不詳。

（３）高野山真言宗総本山金剛峯寺ホームページ「一山境内地とは」（https://www.koyasan.or.jp/kongobuji/　2024 年 9 月 29 日閲覧）

（４）他の子院の石塔を書き写した背景には、公室年譜略に記事にある「高虎公ノ石塔ノ如クスヘシト命セラルトイヘトモ　高虎公ノ石碑ナキ故ニ　松寿院殿ノ碑ノ如クニシテ」とあるように、墓石の建立にあたって、「松寿院殿（＝高虎夫人）の碑の如く」にするような目的で、既存の墓石を書き写す必要があった可能性が考えられる。

参考文献

上野市古文書刊行会 2002『公室年譜略－藤堂藩初期史料』上野市立図書館

高野町教育委員会 2019『史跡金剛峯寺境内（奥院地区）大名墓総合調査報告書Ⅰ』

林　泉 1984『藤堂姓諸家等家譜集』

寒川町企画部企画課町史編さん担当 2006『寒川町史資料所在目録 第 16 集』